



初雨二重拍子篇  
五

~7  
4375  
4



都 太夫 一 中 直 傳

都 羽 二 座 拍 子 扇

板 元 文 華 卷

泰 平 船 畫

魯 首 國 道 行

賴 光 山 入

同 衣 安 山

同 童 子 對 面

島田藏書

美平船

還法をばそふ陸の音也  
ねん海くそ者つめ  
夕日そ山よ禁かそ  
ふちがふそそそそ  
あそ  
萬さ



都太夫一中

都秀太夫千中

都京太夫有中

都富太夫可中  
都節太夫吟中  
都華太夫以中  
都太備太夫童中  
都國太夫半中  
都三壽太夫近中  
都梅太夫鶯中  
都此太夫五中  
都岸太夫鯉中  
都東太夫呂中  
都以名太夫三瓶

都栄二  
都雄二  
都路助  
都權半  
都以十  
都米八  
都駒次  
連長  
都六二  
都松衛

波なみのうねはなみのうねはなみのうね  
君きみのうねはなみのうねはなみのうね  
大おお船せんのうねはなみのうねはなみのうね  
老おのうねはなみのうねはなみのうね  
武ぶ身みをなたらさしあらうならう

毎まい一いち

おんおん松しょう路ろのうねはなみのうね  
御ご免めん此こゝ茶ちや樽すんのうねはなみのうね  
ヤヤシシララめめのうねはなみのうね  
纏ちん贈くのうねはなみのうね  
ううのうねはなみのうね

抑母の紀 そめく 西 あ さら ら だ ら 昔 あ 日 ひ  
皇 み 帝 み の の 法 は 人 に 由 よ り 皇 み 女 め と  
以 も 之 の 迷 ま 伝 た へ ん 有 あ り 存 ぞ 在 ん の  
法 は を 傳 つ へ ば 心 こ ち 也 なり 也 なり  
何 な ら 責 せ ん じ や せ ぬ 也 なり 也 なり

皇 み 子 こ 震 ま 禰 ね ち に へ 也 なり  
帝 み 也 なり 日 ひ ち に 也 なり 也 なり  
臣 み 下 した の 臣 み 也 なり 也 なり 也 なり  
也 なり 也 なり 也 なり 也 なり 也 なり  
也 なり 也 なり 也 なり 也 なり 也 なり  
也 なり 也 なり 也 なり 也 なり 也 なり

池いけのおもむくを見渡す

折角の来たるは

空のまはりの花はな

初はつのまはりの花はな

又また輪わをまもる虚ふなり

落おちるのが其その葉はのしずかに

流ながるのまはりの花はな

たゞ花はなのまはりの花はな

月つきのまはりの花はな

舟ふねのまはりの花はな

あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ

あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ  
あはれなるはたはたあはれ





何なに使つかのの思おものの浪なみ風かぜは  
ああたたままををししののああのの  
檝かきのの車くるまののああららはは  
思おもひひのの思おもひひのの思おもひひ  
園いそ子こををししたたららしして

ああららははののああららはは  
ああららははののああららはは  
早はや速すみにに流ながるるののああららはは  
ああららははののああららはは  
ああららははののああららはは  
ああららははののああららはは

さしの秘のひの程とみ

ぬまのちのすの氷列棹

あすまの月の陣と糸

愛する君の海を舟は

流石下まゆと祝

舟と

秘の首玉と

孝養徳りの海路の旅

かきし着たをきつぬ

南土の子あく母の清

あの日のおまなと

父ちち賢けん文もん首しゆのたんゆん

おのりなるがたかかたあし

らう後ごつつくくのさく

肥ひ前ぜんの虫むし有ある

雲うんせんり獄たけたるのうも

ケシ

三さん日にち子し煙けむりのこ

思おもひさるる我わが身みを

人ひとさ何なにもを

犯ひ後ご子しやう

おのりなるがたかかたあし

めいせいしんしんせいの  
 なるるのたとおるる  
 のせなも建の鶴の  
 心の松系は心  
 誰<sup>たれ</sup>り<sup>こ</sup>子<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>と

ケシキニ

おの父<sup>ちち</sup>はあはれ  
 母<sup>はは</sup>はあはれ  
 ち<sup>ち</sup>はあはれ  
 何<sup>なに</sup>もあはれ  
 神<sup>かみ</sup>子<sup>こ</sup>祈<sup>いのり</sup>を  
 かまあはれ

たゞしおを毎に  
ゆえに止むるは  
歳日まゝにたの  
備は子に小舟  
や井に余をみん

ちかしおをみん  
船の海をたの  
ゆえに止むるは  
かゝるおをみん  
まの

住吉の浦の海  
後には  
兵庫の海  
兵庫の海  
兵庫の海

海  
武庫  
申  
松  
申  
武庫  
海

かきこぼるゝ  
父とて  
眼とて  
徒夫の  
海上  
かきこぼるゝ  
父とて  
眼とて  
徒夫の  
海上

雑の  
むらさ  
子由  
おのた  
雑の  
雑の  
雑の  
雑の  
雑の

あさかき水主みづぬしのくさくさ  
あさかきたのしみのあさかき  
あさかきくさくさのあさかき  
あさかきくさくさのあさかき  
あさかきくさくさのあさかき  
あさかきくさくさのあさかき

頼光山入段

作者 近松門左衛門

頼光たのしみの音小港かたへ西川也  
雲も由くあり大江山  
抑おさ是こゝ六源むつげんの頼光たのしみと我われも之  
は衣丹波かみの國くに大江山



鬼神まきたり。あり。存ぞんのあれを  
も。鬼おに小こかた。鬼おに中ちゆうを。者  
鏡かがみ小この。ぬ。鈴すず。兵へい具ぐを  
入い。笈あひを。肩かた。さ。も。行ゆき。躰たいの  
姿すがた。あれ。ども。其その。主しゅ。從したが。ハ。頼たの。光みつ

保昌定光季武綱公時  
未ま。ぶ。夜よの。う。も。ち。よ。有あ。り。の。  
月つきの。都みやこ。を。た。も。ち。出い。く。  
月つき。終は。る。事こと。を。あ。ら。ま。り。出い。く。  
月つき。の。う。れ。く。自みづか。ま。り。

ゆふ庵の宿をかりし人の  
たしは法けゆるおらの貝  
鐘かねよりききたよ輝たそ  
いづくの辰もおどろあす  
百八おんあうの雲つたそ

お見也みね峰みねよかけ出の  
行者しんぎやや人ひとやたそくも  
すねうろ悪魔降伏の  
清しやう門もん也やおどろあす  
王城おうじやうちんごの山やまくを

向敷きつとちもり魚介

木まじくを深チレツシ  
ニのキなり

秋ふおちりく高たの雄山

花のまあま定じかうみ

つらむがれをちあど山

いふたつたきく山娘の

手織をりの錦うまあしよ者よ

見しよきよ流りとちせ川合

<sup>ワキ</sup>流津木の葉はあきんだ

ぬよまむあま船ふねもつりれ

もみぢらまねぢうがつか  
河のまの神をこゝろ方とあそ  
淀ハふら〜まねあけ小  
玉の水うたあきらけく  
うんとま〜ぬの鳩の鳩の峯

山八日

凡源の氏の神流の末ハ  
弓矢とあつて魂と神慮  
福りませ〜ぬおぢ  
三宝諸天納受少  
鳥もともあつてあつて佛法僧

那<sup>レ</sup>の尾山をよぢよアツク  
大<sup>コ</sup>海<sup>ノ</sup>の駒<sup>コ</sup>小<sup>コ</sup>つ<sup>ツ</sup>の<sup>ノ</sup>計<sup>ノ</sup>の  
宿<sup>マ</sup>をい<sup>ハ</sup>は<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>ま<sup>ダ</sup>だ<sup>由</sup>付<sup>だ</sup>

おのの身な<sup>ウ</sup>ら<sup>ウ</sup>め<sup>れ</sup>り<sup>く</sup>  
た<sup>け</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>ら</sup>や<sup>金</sup>剛<sup>杖</sup>小

伐<sup>ら</sup>く<sup>法</sup>け<sup>り</sup>と<sup>く</sup>障<sup>木</sup>系<sup>系</sup>  
老<sup>も</sup>ち<sup>ら</sup>ら<sup>ぬ</sup>夫<sup>の</sup>扱<sup>越</sup>く  
爰<sup>地</sup>の<sup>た</sup>を<sup>取</sup>耳<sup>小</sup>も  
あ<sup>ら</sup>び<sup>目</sup>も<sup>ら</sup>び<sup>と</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>ぬ</sup>  
山<sup>か</sup>ら<sup>ち</sup>く<sup>削</sup>あ<sup>せ</sup>る<sup>小</sup>

くまのぼり岩いこまり代通寺ふちの音  
穀のこ重しもくろがきうなくま  
乃ちきみもれ名も似にび  
大江山のぬりなくち  
あひい娘室むろのき着きたまふ

同衣洗段

作者  
近松門九郎

頼たの光ひいとあやよよ勝かをかけ  
是こよりまくはたもち  
東西をひつくぬを何を下  
何をまたなるなりし討うちを

進退まゐはくまのまのり

後令五年たといの十年も

鬼神きじんの面おもてをみる事也

頼光よりみつの巖いわは山かみやまにあらざらん

かゞぐいたの事ことのたまふ

五人ごにんの一人一人ひとりひとりの

法ほう誕たんもや及およびびななりり生なるる國くに也

かゞぐいたもも眞まこと途みち也なり乃すなはちち二ふたつつ也なり

保昌たけまさハ上かみ総さうの國くに海上うみにに生なたり

定光じやうかうハ信まこと流りゅうの國くに海うみの氷こおりの生なる

季武ハ遠江濱名のうかれ

細ハ武藏の箕田の者

ぬ公時ハ伊豆國と申せ

生所もあつて宿もなき

山姥が子たれを産ふも山

産室も山舎初ふも山姥した

損徒はしのえく丹波一國の

山狩布てても何秘の事

あんなあたそ丸

勇ましく勢方といふも



天てん魔ま厄やく神しんも怨うらみつつままどどるる

見ま後ご世せ老らう馬ばも通とつつぬぬ坦たん侍し

老らう多た敷し山さん賤せんるるままどどるる

ああららふふ入いりり内うちどどりり

小こ舟ふねををここへへつつままりりままるる

ままるる海うみののままりりとといいふふもも

頼らい光こう不ふ敵てきの大だいおおももとと

いいののふふ山さん賤せんはは國くにのの千ち丈じょうがが嶽たけ

鬼おにのの窟くわははいいははくくななるる我われ

ままのの命いのちほほららままののななままりりたた

卯  
毛

おもしろき所におるうわ

ゆき用公せんたろん家

イ  
白羽

かましくまよひたまふいな

ヒ  
ヒリ

あましく南よあつそ

木ぬらひまひも根あり

白起雲うきえたるわ

おもしろき息が城まより

たぎんそあつた流の水

西あつた時もある

くの峯よあつた

息ぢいのいそと屋やときくはつり  
人ぢい倫えんたゆんだ誰たれありそ  
ろ人ひととそはらるる花  
あふ客きやく供きゆうと教けうくそは通とりん  
頼たの光ひかりハ力を得とたす何なにたは峰たけ

越こやとく谷やよ峰たけをとろたす  
猪いの猿さる馬うまの聲こゑたぐ  
のちちききを天あま小こ逆さかのちちかき  
眼めら教けうめめききくくををああららよ  
あま入いららいいももめめささああしし

十<sup>ト</sup>万<sup>マン</sup>里<sup>リ</sup>の波<sup>ハ</sup>多<sup>タ</sup>う<sup>ウ</sup>

はく<sup>ハク</sup>う<sup>ウ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>を<sup>ヲ</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>

二<sup>ニ</sup>千<sup>セン</sup>歳<sup>サイ</sup>に<sup>ニ</sup>石<sup>イシ</sup>橋<sup>ハシ</sup>と<sup>ト</sup>成<sup>ナリ</sup>た<sup>リ</sup>

人<sup>ヒト</sup>中<sup>ナカ</sup>れ<sup>レ</sup>柔<sup>ユウ</sup>も<sup>モ</sup>多<sup>タ</sup>う<sup>ウ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>を<sup>ヲ</sup>

高<sup>タカ</sup>根<sup>ネ</sup>の<sup>ノ</sup>雲<sup>クモ</sup>よ<sup>ヨ</sup>枕<sup>マクラ</sup>を<sup>ヲ</sup>と<sup>ト</sup>た<sup>リ</sup>

岩<sup>イワ</sup>も<sup>モ</sup>軟<sup>ニヤ</sup>水<sup>スイ</sup>は<sup>ハ</sup>咽<sup>ノド</sup>を<sup>ヲ</sup>潤<sup>ル</sup>

枯<sup>カラ</sup>木<sup>キ</sup>も<sup>モ</sup>び<sup>ビ</sup>く<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>横<sup>ヨコ</sup>た<sup>リ</sup>

苔<sup>コケ</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ふ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>由<sup>ユ</sup>き<sup>キ</sup>げ<sup>ゲ</sup>ま

か<sup>カ</sup>つ<sup>ツ</sup>く<sup>ク</sup>を<sup>ヲ</sup>た<sup>タ</sup>ぐ<sup>グ</sup>う<sup>ウ</sup>足<sup>タビ</sup>を<sup>ヲ</sup>つ<sup>ツ</sup>ま<sup>マ</sup>だ<sup>ダ</sup>

木<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>根<sup>ネ</sup>よ<sup>ヨ</sup>取<sup>トリ</sup>つ<sup>ツ</sup>き<sup>キ</sup>さ<sup>サ</sup>う<sup>ウ</sup>つ<sup>ツ</sup>ま

心をくぐりたきをよをけし  
<sup>イ</sup> <sup>三</sup> <sup>言</sup> <sup>言</sup> 見あぐれた糸尋れ晴月  
<sup>かん</sup> <sup>えん</sup> <sup>せん</sup> <sup>げつ</sup>

きのぎをけづり

見あろせを午丈の碧潭  
<sup>イ</sup> <sup>言</sup> <sup>言</sup> <sup>言</sup> 藍ふるみけあり  
<sup>あめ</sup> <sup>たん</sup> <sup>あき</sup> <sup>たん</sup>

耳ふるみけありのこころ  
<sup>ミ</sup> <sup>ミ</sup> <sup>ミ</sup> <sup>ミ</sup>

雪の下ゆくちりく水の

音はる言問かりはたは  
<sup>な</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup>

去あるとはなる松と移

木こ蔭かげよりさかへ人ひとくへ

息いきをやさしくするめあふ

芽こぼれ生なまじけ。木蔭こかげをえんた

日ひのうかりなまぬ上かみサ湯ゆの

衣えは深ふかなる小袖こそでをもち

おれ谷川やがわはらもらひてし

あまごころをよほし

公こう時ときえつひとち化かたのく

あまごころをよほし

あまごころをよほし

みやこ<sup>ま</sup>あふ<sup>ん</sup>け<sup>い</sup>の<sup>り</sup>  
 酒<sup>ま</sup>吞<sup>ん</sup>童子<sup>ざう</sup>の<sup>り</sup>  
 羽<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>志<sup>か</sup>の<sup>り</sup>  
 あま<sup>の</sup>の<sup>り</sup>特<sup>も</sup>  
 ま<sup>の</sup>連<sup>あ</sup>

か<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>上<sup>り</sup>人<sup>ら</sup>  
 り<sup>ら</sup>だ<sup>ら</sup>数<sup>を</sup>も<sup>も</sup>  
 志<sup>の</sup>子<sup>を</sup>童<sup>子</sup>の<sup>り</sup>  
 角<sup>の</sup>の<sup>り</sup>  
 股<sup>を</sup>と<sup>と</sup>海<sup>と</sup>名<sup>づ</sup>

血をききけり 鮫子よ入て  
いさよ 砂まをききけり  
海ももりよ人れ 砂をき  
あまのり 身もたれ人よ  
砂をききけり 物あまの

夏よ海へかきかきけり  
可きさよふら人も妹も  
ゆりかしの森海よふらに  
今のこのちもかきけり  
血をききけり 死がい骸がいをき



せめても世の人の心づき  
のまじりたる客位を  
神よまじり申す泣ぬま  
頼光もあまじきたまひ  
あぢげきり世のまじり

まじり勅をかしき  
鬼神退治の向ふ  
きつは住家の案内あり  
悪鬼をほろぶかみ  
なまじりあはれ

かづき屋ツキ—まのなまし  
あやツキもあや—ぢあお  
身のかゝる世のあま  
乃ツキぢき—中屋—  
鬼ツキの城ツキちちりれども

案内去るぬたツキ百目も  
あや—所ツキをめぐりあり  
連ツキなもろく春ツキ属ツキどももふ  
あや—免ツキらん—ツキ海太事  
あや—あやをんがらんふと

きりくたくと目もたなまび  
木のるをさけく十町斗  
ゆくうまななまおま  
鬼の城も我者なま

キヌ洗

同童子對面段

作老 近招門を

石イカの築つ地ちく海うみの門

穴あなも洞ほらともいひかかく

夜や母ははれれたた手て眷けん属ぞくとも

番ばんやや有ありりく並なら居いる

頼光頼おおくさび大音あけ

羽馬山たぐろ伏せんたふまよひ

目も苦る海窟かうりの芳志とまたらる

スハ忍人ぐめん友の中引裂きり喰んと

しめめグインサマお上おとぎめ

おつくーか上への事

イニンニギカラランガルマニスウ

ゴウくーラウヤま入まルま

あまいまのまあまいま

さしに直まちまたまハナ

童子ふかくもくつたらん

やぐくま出せくもあぬ

<sup>たり</sup>ハツト <sup>小</sup>色をまき

<sup>る</sup>縁の媽 <sup>は</sup>終度一たまふ

<sup>合</sup>時り山あり谷あり

凡あまふまらるのせり

らん考書のかありふん

四方よ <sup>と</sup> <sup>た</sup> <sup>り</sup> <sup>ま</sup> <sup>の</sup>

戸張 <sup>と</sup> <sup>か</sup> <sup>り</sup> <sup>い</sup> <sup>ら</sup> <sup>ひ</sup> <sup>た</sup>

<sup>め</sup> <sup>ん</sup> <sup>は</sup> <sup>ら</sup> <sup>い</sup> <sup>し</sup> <sup>ら</sup> <sup>ひ</sup> <sup>た</sup> <sup>り</sup>

面色 <sup>ら</sup> <sup>い</sup> <sup>し</sup> <sup>ら</sup> <sup>ひ</sup> <sup>た</sup> <sup>り</sup>

トツく象れ如く頭禿り

肩志び里大枯子れ唐後

紅の袴着るはじく脇息ふ

横をれくしと玉の

松る上鶴達腰お手を握

足山出り枕よまゝ鉄の捧

桀紂の奢れ眼が人々を

きんとるく我住山常をるべ

峰よ秀方立谷底よ雲起る

木樵炭焼杓人もたなれん

来るるがけに鳥島侍で  
御子壻を失へりおし  
況人間の事も天を欠つ  
来りてや語りて人となん  
頼光きこめきん御不審ハ

流尤もく我々の祖  
役の行者後鬼前鬼といふ  
鬼神をはごころなる山を  
踏むけちよ流を汲我も  
奉國羽鳥山を出る大峰

山上めぐり来り都一見のる  
夜をこめ夜をうけいんぐる  
山陽道さんやうよりたふこまよひ  
おのまびもうら来り童子  
清目小かろるり役の行者

清引合あせいちがわ一樹いつうの籠かご一河いちがの流  
他た生せい合がれ縁えんとるや酒さけを  
持もせしるるる童子どうしも来きり  
秋あきも夜よもすすぐぐら酒盛さかせん  
お宿しゆくをめぐりみたまみたまの



余ヒナリ髪カミももちちげげももどのどののの庵あんななままふふ

きき寸すんののれれ童どう子しもも名なおおれれ并な葉は

欺まごころ元もと来きたよよめめむむ酒しゅとときき

殊ことごと勝くわよよゆゆ告こ偽いつはり達たつ行ぎやう法ぽうとと云い

山やま路ぢのの湯ゆれれ風かぜ流なが花はなもも笑わらもも

女おんなのの直ちよく白しろ衣え持もせせみみ清きよ酒しゅもも

給たまららんん童どう子しのの海うみももおおひひららせせんんやや

塵ちりををままるるくく人ひとらられれ侍さむらい小こ

石いしちちののくく列りやく塵ちり一いつとと花はなくく

桃もも子こおおるる塵ちりののりりくくとと中ちゆうらら敷敷

眷属の悪鬼あゝき邪鬼まがき踊出おどり々々

上臈う毒たのををははううままよよせせく

鶴う有たの人をのをつつのの如く

腕うでををぬぬきき股もををおおきき血ちをを

ちちららくくききららやや絞ま出だをを

志きりままぐぐ長ち柄ぢのの瓶びん子こふふののまま

魚いふふくくくく珍めづいいししルル数かず

山やま家かのの濁にご醪ろう亭てい主しゅにに役やく々

童子どうしののむむららののちちららををとと法ぽうじ

頼たの光みつよよちちりりをを縁えんよよふふるる

めづりし酒こ酒ま首ま女ん小連つ之ま

朽くいいままああくくてていいららしし

津つののとと方かくく公こう時ときりりとと舞まい

内うちききりり待まち兼かねててりりとと頭あたま截きり

法はふどどけけそそくく三さん魚ぎよののいいととちち

シしエえラらウうももいいままそそ天あま竺たつ心こころををななぞぞ

六む南なん通と津つ海かいききみみよよ加か賀がろろよよ菊きく酒しゆ

南なん都とよよかかままりりのの鴻こう殿でん山さんのの

つつももががろろれれ羽う馬ま山さんのの隣りん走そうららびび

態たい壯さう山さんのの右みぎののくく地ち敷しき多たのの

名河<sup>めい</sup>の<sup>ま</sup>魚<sup>う</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>振<sup>び</sup>を  
河<sup>か</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>始<sup>は</sup>る<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>一<sup>いつ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>廻<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>  
多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>者<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>今<sup>いま</sup>切<sup>き</sup>  
た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>か<sup>か</sup>き<sup>き</sup>女<sup>に</sup>の<sup>の</sup>腕<sup>うで</sup>た<sup>た</sup>き  
お<sup>お</sup>志<sup>し</sup>板<sup>いた</sup>は<sup>は</sup>盛<sup>も</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>終<sup>は</sup>り<sup>り</sup>す

於<sup>お</sup>こ<sup>こ</sup>し<sup>し</sup>調<sup>てう</sup>へ<sup>へ</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>云<sup>い</sup>ふ  
た<sup>た</sup>つ<sup>つ</sup>所<sup>ところ</sup>を<sup>を</sup>頼<sup>たの</sup>光<sup>みつ</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>へ<sup>へ</sup>か<sup>か</sup>敷<sup>敷</sup>  
鮮<sup>せ</sup>魚<sup>ぎょ</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>外<sup>ほか</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>  
調<sup>てう</sup>味<sup>み</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>と</sup>指<sup>さ</sup>添<sup>そ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>い<sup>い</sup>て  
走<sup>は</sup>り<sup>り</sup>四<sup>よ</sup>五<sup>ご</sup>寸<sup>すん</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>切<sup>き</sup>て

口は入レ醍醐かいごくと茶ちやたまをた

見みもくと四天王しやうてうがか切きく

舌しやうあらふふがあ者しやうとは茶ちやたまをた

童子どうしがあるきヤアらう好この酒しゆ者しやう

客きやく僧しゆん達だつよるくあるきたま料りやう酌しやく

あんとあらうはらうはらう

賞しやう翫くわん志したまをたふふ心こころならむなし

頼らい光こうきももはらうあまりん花はな

見みらうがあ行ぎやうのし習しゆ志しししとし

給たま物ものたまだんよるまなぬど辞ことば退たい

世の殊々<sup>たらし</sup>振ふ洒者<sup>あ</sup>奉<sup>ん</sup>来<sup>ん</sup>  
空<sup>くう</sup>の人間<sup>にんげん</sup>食<sup>く</sup>の三<sup>さん</sup>味<sup>み</sup>は心<sup>こころ</sup>  
有<sup>あ</sup>不<sup>ふ</sup>審<sup>しん</sup>有<sup>あ</sup>と答<sup>こた</sup>らぬ  
童子<sup>どうし</sup>真<sup>まこと</sup>をさる<sup>る</sup>其<sup>その</sup>悟<sup>さと</sup>れ  
其<sup>その</sup>見<sup>けん</sup>あり人の血<sup>ち</sup>をまじ

去<sup>い</sup>むらを服<sup>ふく</sup>去<sup>い</sup>ぬ佛<sup>ぶつ</sup>の  
教<sup>きょう</sup>はあやもいも也<sup>なり</sup>只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>止<sup>とど</sup>り  
給<sup>たま</sup>ふに次<sup>つぎ</sup>をく<sup>く</sup>増<sup>ぞう</sup>本<sup>ほん</sup>  
童子<sup>どうし</sup>のたゞも鬼<sup>おに</sup>神<sup>かみ</sup>とあり  
悔<sup>くわい</sup>歎<sup>たん</sup>たふも其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>は心<sup>こころ</sup>海<sup>うみ</sup>に

人しらす人を始て教ふる

よきるとお守り女直白かんと

おまもりも今いふのそも止り

鬼音の此を移りし

いづく童子の因果物語

語るまゝせん我ハ元越後の

國の生五女も父も母も

十一女も母もおろし父母

教養良のるよそ伯父伯母

女抱も山寺へのあや

善ぜん少せうも悪あく少せうも因縁いんえんあり

のまろふ母ははの乳ちちをあい

十じゅう支しおぐ懐なごよいつごのそ

朝暮あさゆふ乳房ちちぶを吞のむ由よし

乳房ちちぶ味あじとひのまろふ兼あ五穀ごこく

口くちよふ乳ちち由よし夜よ入いる山寺さんじの

師し近ちか同宿どうしゆく見法けんぽう所ところ乳ちち围あふ

志しのんぐ乳房ちちぶを吸すはめ

程ほど笑わら見みんんののもろふ人ひとも

おもしろん乳ちちはは追お尋ひれ



比叡山ら ぎん小登の かり三子坊つみ此乳を  
夜あやをく吸あく廻まわすはつ終つひ不  
生あまの血を吸あ出で乳味あまハ忘わすれ  
血ぐんを去きのむ息あ鬼ぢありと  
傳だん教きやう大師だい我わが立た松まつをま追お尋ひす

播磨はりま此書まよ寫ま小登まよ三子坊つみも  
一いつ山の血ちを吸あくはつより去さる  
むむはは喰く安やすくく心こゝろもも自ま然じに  
猶なほくく人ひと凡たゞ小こ喰く付つを  
口くちハ裂さてて牙は生はひひ終つひ播は磨らを

追出あきしか高か姥山やえんの登あをあ弘あ法らひ

大師阿字の利あ釵けんの追あ拂らひ

<sup>ホリ</sup>一ち日足いちにちを多た免ふききせせせせ

多た免ふききせせせせのの峯みね

多た免ふききせせせせををととりりととららしし

いいののああののハハののナナののタタののタタ

おおのの鬼おに少すくななかかーーゆゆへへ

本ほんのの天てん然ぜん鬼おに形かたちととあありり

法はふのの人ひとのの似に人ひととともも

海うみのの醉すいをを頭あたまのの正ただ躰たいをを

見たまはつらふ切を教者偈  
毒たぢもおもちを付たぢふま  
天た人天上の歡くえん樂らくも  
いぢ交まへ竭つふきく物を  
上うへに執し鳥との鬼神くわんしんと身み本ほん

いぢ交まへ竭つ人ひとををけけららハ  
悪あく乃なよよ階た生か眾ん走しくくいいぢぢぢぢ  
苦く患げんののちちのの念ねんととささんんくく悔く心しん  
ああぢぢぢぢぢぢ現げん世せををくくらら人ひと都と六ろく  
源げんのの頼らい光くわうとと云い武ぶ勇ゆう別べつ達たつ者しや

彼きやつが良等らうとう後ご迎むかひの細こな産う生ま  
門かどより我わが眷属けんじゆく淡木たんぎ童子どうじが  
腕うでを切きと敷しかどに剛ごうの武者むしや  
季子きこ武定ぶてい光保ひかりたも昌公まさひこ時彼とき  
目めのむつりきりに我われハ都みやこへ

行ゆ事ことはしは者ものたを防まもぐえ  
たの城廓じやうかくハ梅うめの神通しんとう  
自在じざいの頼光たのひかりも是こゝ迄までハよも  
あどより彼かれもあつとも  
は世よに敵てきハふせぐや

悪業あくごうはよからよから未来こゝろの敵かみか

何をなにもつゝ防まごがき浅あはかりし

鬼音おにねの身み去さよもつゝ尋たづね

志し似にも怨うらみは別わかたずふた

決い然えん見けん中ちゆうも也や釋しやく迦あは羅ら也や

吳ご軍ぐん人じん本ほん國こく一いつ悔くわいりたまひ

我わが死し殺ころせし幾いく千せん人にん凡ぼん後ご世せ

訪ほうくたへ宿しゆく傍ぼうと去さ月げつく

語かたハ怨おん愛あいも又またあはれあり

人ひとく眼めとめをを見みあはせ

宗此のむねむを孝と安倍のあや

清明せいめいが加持かぢの酒人間にんげんよハ

不老不死ふろうふし鬼音おにねよハ大毒おおいどくの

神かみ変かへ奇き特とく酒さけ筈はずなれ中なかより

名な尖とがリり有あ新あらたき津つ教かへん

血ち湯たまを止とどまらばつひの清きよ湯たまハ

後のちさんと各おのりのりみ春はる有あき後のち

童子どうしくらゐををあまららし

面おもて斗との酒さけ盛もととき

洞どう欲よくささつつ志し童どうし子こががああし

ぞく大壺を山守おはし

合入のきまらぬとついで

<sup>上</sup>一むけり交く三献はし

是はつらなる名酒もや天の

耳露も秋や人早心魂小

志つたり殊あふ酔くゆき

云も理清明が加持の毒酒

ちや舌の根も中のりか子

ぢふお山ぬせは酒徳し樂まじ

酒は酔く世をらん伏軍事ハ

水の萍うすかな 兵も似に我蜂わがち

浮世の人の死しと劉伯倫りゅうはくりんの

金言善惡きんげんぜんあくなるを肉果にくくわも

が血も吸すたたくを吸すたがはし

人喰くひめくたたくをくく

六人むにんがまのたをこころばおまぐ

目前まへかた敷しを浅あおま

けんぞくたも啗のどちら

た人も出でるすく

合子がし茶ち椀わんをゆ

合が子し茶ち椀わんをゆ



吞よりちやく碎みぞし

足もいあらうくんえりした

<sup>四</sup> 大<sup>ヤ</sup>事の海をたのしから

いふぬまよつが海<sup>こ</sup>秘<sup>ひ</sup>蔵<sup>ざう</sup>の

店<sup>みせ</sup>もつづ吞せそく<sup>のん</sup>羅<sup>ら</sup>し

六<sup>む</sup>もくく<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た

<sup>た</sup>か<sup>か</sup>ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>三<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>君<sup>きみ</sup>面<sup>おも</sup>面<sup>おも</sup>か<sup>か</sup>せ<sup>せ</sup>

たもく<sup>こ</sup>と<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>お<sup>お</sup>う<sup>う</sup>も

ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ト<sup>ト</sup>古<sup>こ</sup>郡<sup>ぐん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>む<sup>む</sup>

洞<sup>ほら</sup>小<sup>こ</sup>頼<sup>たの</sup>光<sup>みつ</sup>も<sup>も</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>ど<sup>ど</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>す

眼遣めづひを「音里子ねりこととがめ

狭棒くさ追取おひつつままより「ヤやヤや

のねハ源げんの頼光よりみつよな

次ハ淡木つたぎよよをを負おせせららぬ

海辺うみべの細定ほそさだ光季ひかりゆき武保昌ぶたへさむ

公時こうじいいううせせふふはは沸わきき三さん河がに

心こころもも教しええはは春はる自みづか属ぢたたとと狭杖くさぢ

横よこへへああまま丹に板いたどどううくく

ざざつつととぬぬままららしし一一ああ眼まなこ

くくささししんんははままははししららののまま

おめく勢ひの身れ毛も  
えたの斗りなう約頼先女も  
さいりせかしくと笑日奉  
毎双ぶの剛者つこは我くが  
似た数とや弱者よそは似つる

さう先ハ妹いもおぬ去いのながら  
慈悲じい人ひともくをま修行しゆぎやうしそ  
有情うじやう悲情ひじやうを物ものと大願たいがん返  
山伏さんぶつが多くちくれ人を殺ころし  
殺生せうじやうさの事をこととまを

大悪人たいうあくの頼光四天王は  
似たつと六む甲かもつとつと  
勿な解なな一いきい世尊せそんのせの  
せん童子どうしは古この四しつつは又また  
身を替かへ鬼神きじんはとと

成なりふふとと正ただ覺しひひ又またたたああ  
白しろかかくくたたささはははは童どう子しより  
一ひとつつ寸すん傷やうれれ支しななつつととああららうう  
ああらら命いのちをを石いしれれももはははは  
ああつつ海うみののああかららししと

おもひ切つた数がんごせよ眼を  
ぬかすらんごうつ 志あつたる  
鬼神まじりの横あし乃ちあつとうや安  
くとたごめられあまを  
あつて「志あつたりなり」

国くにへつ誠まことの彼かのう其その心こころ  
よもすむじと思へた常とこよはよ  
かたあゆハサハ持せの流海  
機嫌きげんよなき車をちたつ  
あつてあつて入へる

酒のどがどしどし鬼とハあがり  
白れどよ我もどなるしおを  
お見よハ急あせうしむなれど  
副かと坪おハ出ぬのハ夜も  
かひぬ体からだのれ我もまじ

おんこらむらむらむらむら  
対面たいめんと荒海あらいの志やじ  
押明おしあき奥おくの入いれ春はる届とどとも  
神かみ変かへ奇き持もちの酒さけも碎くだ前まへ後ご  
志しくくののららびびきき頼たの光ひかり怪あや社しろ

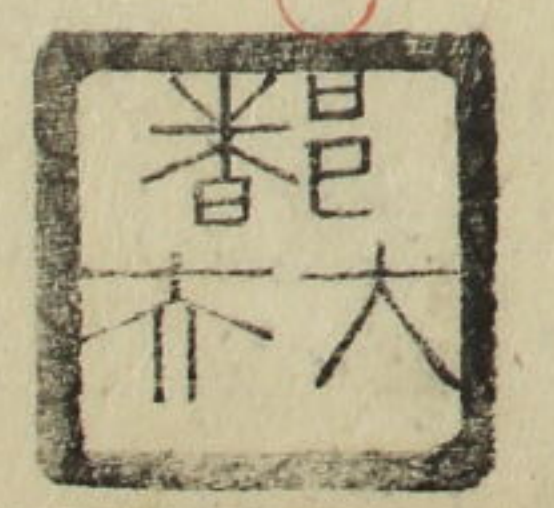
限あきなく神通自在あきに變化かへん  
としそ何なんを對面たいめんとて後回  
あや今いま宵月よひづきのうちへ先まへには  
めしを心こころ淨きんじやうに用もち意いせよと  
甲かみかくとまを入いれあや鬼おにれ

尾おしをぬく毒どくのひびきつよ  
口くち多おほくう悪あく及およ鬼おに一口ひとくち丹毒たんどくの  
酒しゆ是こゝより毒どくの心こころ味あじを鬼おにと  
名なつてその名なをさし

文政三庚辰年孟春  
 都大夫一中  
 文政三庚辰年孟春  
 都大夫一中  
 文政三庚辰年孟春  
 都大夫一中



近來予一流世よむ流すれよ  
 古板の正本ハ皆細字故ハ  
 改々寺所得ある文花堂の主人  
 再板を多のむりハありぬ  
 于時  
 五代目  
 文政三庚辰年孟春  
 都大夫一中



正本板元

江都瀬戸物町  
 文花堂  
 塩屋庄三郎



